

けやき

第8号 2012年3月16日発行



「つながり」は築いていこう!!

大仙市教育委員会 教育長 三浦 憲一

昨年は東日本大震災に遭遇した。同じ東北人として早い復興を願わずにはられない。命を守る、支え合うという点で防災教育の大切さも痛感させられた。支援や交流活動を通して、少しでも「元気」の復活につなげたいものである。

大仙市は行政もいち早く動いた。市民ボランティアの数も多かったし、全ての学校で支援活動が展開された。児童生徒の思いの伝わる交流活動も見られ、全校生徒で継続している学校もある。

新学習指導要領で重要視している「生きる力」の育成に向けて具体的実践が見られたことに対し、学校、家庭、地域の一体感が一層醸成されたものと考えている。



学力、心力、体力は「生きる力」の相互作用であり、基礎となり、実践する活用能力にも結び付く。

本年度も他県から多くの教育視察団が見えられたが、大仙市の児童生徒の力は、教職員の努力も含めて総合的に学力に結び付いているものと認識している。

日常的な小・中・高・大を含めた異校種間交流、また、学校間交流や積極的なPTA、地域との連携などにより、「学んで育つ」という教育環境が築き上げられてきていると感じている。

環境教育部門で環境大臣賞を受賞した学校や、マーチング部門で2年連続日本一を受賞した学校、全校ミュージカルや音楽部門で特色を発揮している学校、小・中連携で外国語活動やキャリア教育、新教育課程の授業研究に果敢に挑戦している学校、



また、スポーツ面で東北や全国大会で活躍した学校等々、チャレンジ精神をもって「つながりながら」教育実践に努力されている教職員の皆さんにあらためて感謝申し上げます。

昨年、世界一になった「なでしこジャパン」の皆さんから学ぶことが多くあった。例えば、奇跡といわれた勝利は、「待っていても来ない。毎日の努力の積み重ね以外にない」「攻守の切り替えの速さと、積極的にプレスをかけるスタイルの一貫性」等々である。



名前もいい。「なでしこ」の花は一輪だけでは気付かない時がある。集団で咲いた時に美しさを発揮するチームワークそのものである。

そんなチームの成長ぶりを写真に撮り続けたサッカーカメラマンの早草さんは次のように述べている。

「できないのを環境のせいにはしない」「自分より大変な人がいる。そう思うことで頑張れる」と。

学校や家庭、職場でも「育てる」「育つ」という視点で大切な言葉ではないだろうか。

教育部門でも、厳しい環境こそ一人一人を大切に「つながって 丹精の華」を咲かせたいものである。



写真は全て「福島っ子と秋田っ子の冬期交流プログラム」より

- ①川を渡る梵天の紹介（花館小学校）
- ②刈和野の大綱引歓迎セレモニー（刈和野小学校）
- ③協和スキー場にて（協和小学校）
- ④蝦夷ほたるづくり・払田の柵にて（高梨小学校）

新学習指導要領の趣旨を具体化し深化充実するための 教育課程編成、指導方法等の工夫改善に関する研究

大仙市立大曲中学校 教諭 物部 長 秀

1 はじめに

本校の生徒は、理科の観察・実験に対する意欲は高いものの、科学的な思考をすることや自分の考えを分かりやすく表現することに苦手意識をもっている生徒が多い。

そこで、本事業の研究指定を受け、指導内容の体系化や探究的な学習活動の指導方法を研究し、生徒の科学的な思考力や表現力の育成を図りたいと考え、実践研究に取り組んできた。

2 研究主題

自然の事物・現象に主体的に関わり、
問題解決能力を高める指導方法の工夫
～ 学び合いを通じた科学的な思考力や表現力の育成 ～

3 研究の重点

- 本研究は、次の二点を重点に取り組むこととした。
- 小・中学校7年間を見通した年間指導計画の作成
- 科学的な思考力や表現力の育成を図る指導の手立ての工夫

4 今年度の主な実践

(1) 探究的な学習活動を展開する上での課題と生徒の思考活動の現状把握

科学的な思考力や表現力の育成には、探究的な学習活動の継続的な実践が重要である。そこで、探究的な学習活動を実践するに当たっての課題を、継続的に授業を行う中から把握した。また、学習シートやホワイトボードの記述を分析し、生徒の思考活動の現状を把握した。

【探究的な学習活動を行う際の課題】

- ・予想の段階できちんと自分の考えをもたせて、まとめや考察での科学的な思考・表現につなげる必要がある。
- ・いくつかの観察・実験を組み合わせた問題解決型の学習では、2単位時間連続の授業が、生徒の思考を深めたり十分に練り合いをさせたり、実感的に理解させたりするために有効であると考えられる。

【生徒の思考活動の現状】

- ・観察・実験の結果と考察を混同しており、考えが整理されていない。
- ・ホワイトボードが結果をまとめるために活用され、学び合いでの思考に活用されていない。

(2) 探究的な学習活動における思考活動や表現活動を充実させるための工夫とその実践

探究的な学習活動を行う際の課題と生徒の思考活動の現状を受け、授業で次の工夫・改善を行って研究を推進した。

① 予想に基づく授業展開の工夫

生徒が授業の課題に対してしっかりとした予想をもつ時間を設定し、探究的な学習活動全体が生徒の予想に基づいて展開するように工夫した。

② 学習シートの工夫

結果と考察を分けて書くことの指導を徹底した。また、複数の実験結果や考察を1枚の学習シートに書き込めるように工夫し、生徒が思考過程を振り返りながら授業全体のまと

めができるようにした。

③ 2単位時間連続した授業の工夫

観察・実験の結果を踏まえ、科学的な思考や表現が十分にできるよう、毎週2単位時間連続した授業を確保するようにした。

④ ホワイトボードの活用方法の工夫

観察・実験結果を基に考察を導く場面でお互いの思考を整理するためにホワイトボードを使用させた。その際、文章だけでなく図なども用いてまとめさせるようにした。

【本校の2単位時間連続した授業の考え方】
2・3年生の週4単位時間の時間割の編成を工夫し、毎週2単位時間連続の授業を設定した。

通常の時間割例					本校の時間割例				
月	火	水	木	金	月	火	水	木	金
■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
1時間 × 4日					1時間 × 2日			2時間 × 1日	



(3) 探究的な学習活動を計画的に位置付けた年間指導計画の作成

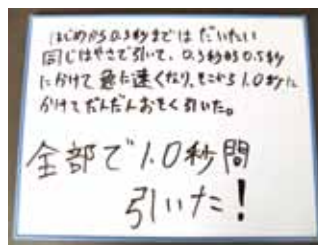
(2)①～④の取組を基にした探究的な学習活動を、各単元において計画的に位置付けた年間指導計画を作成し、来年度の研究推進の土台を築いた。

5 今年度の成果（生徒の変容）

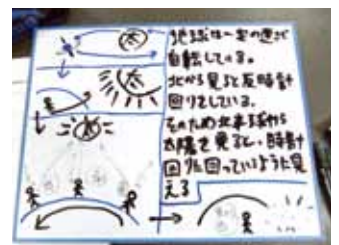
2単位時間連続で探究的な学習活動を行うことで、生徒が科学的な思考をし表現する時間が十分確保できるようになり、学習内容の理解も深めることができると捉えている。

また、ホワイトボードの活用からは、話し合いを通して思考が整理されていく様子や文章だけではなく、イラスト等も交え豊かに表現する様子も捉えることができた。

【ホワイトボードの記入内容の変容】※同じ3年生の生徒



6月の記入の様子
(紙テープグラフの考察)



12月の記入の様子
(日周運動の考察)

6 来年度に向けての課題

実証性の高い観察・実験を積み重ねることで思考し表現しようとする意欲は着実に向上してきていることから、科学的な思考力や表現力の一層の伸長も期待できるものと考えている。来年度はその検証を進めるとともに、授業改善についても更なる工夫と実践事例を積み上げていきたい。

新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究（文部科学省）

自ら学び、一人一人が輝く子どもの育成 ～伝え合い、学び合う授業づくりから～

大仙市立清水小学校 教諭 星野 昌子

1 はじめに

中仙地域では、9年間を通して子どもたちを育てるという基本方針の下に、地域や自校の課題の改善に向けた小・中連携の取組を進めている。

今年度は、文部科学省から「新学習指導要領の趣旨を踏まえた学力向上等の方策に関する調査研究」の指定を受け、中仙中学校区の小・中連携の取組の拡充・深化を図るとともに、本校の課題改善に向けて研究実践を進めてきた。

2 研究の概要

【本校の課題】

- ・必要な情報を読み取り、それをを用いて表現する力の育成
- ・自ら課題を見つけ、さらに深めようとする意欲の向上
- ・言語活動の充実による思考力・判断力・表現力等の育成

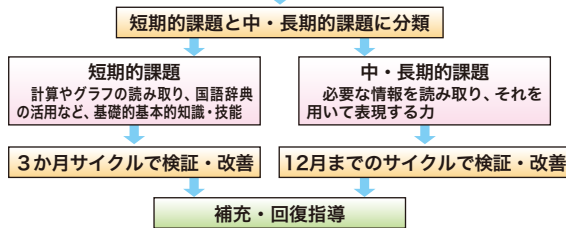
【研究の重点】

- I 基礎的・基本的な知識・技能の習得及びこれらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成に関すること
- II 学習習慣の定着や学習意欲の向上に関すること
- III 全国学力・学習状況調査等の結果を踏まえた教育指導の充実や学校状況の改善に関すること

3 主な実践

(1) 継続的な検証改善サイクルの確立

《第6学年の例》 4月昨年度の全国学力・学習状況調査を実施

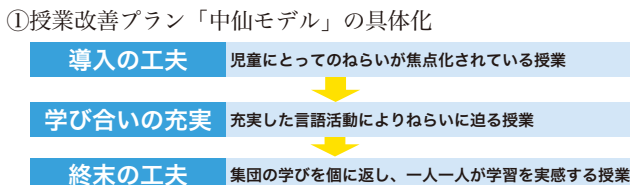


(2) 9年間で育てる「学び方」指導

- ① 家庭との連携による学習習慣の確立
 - ・中仙地域6小・中学校による「家庭学習推進の手引き」作成
 - ・本校児童の実態に応じた、より具体化した「手引き」の作成と配布
- ② 9年間を見通した話し方、聞き方、ノート指導

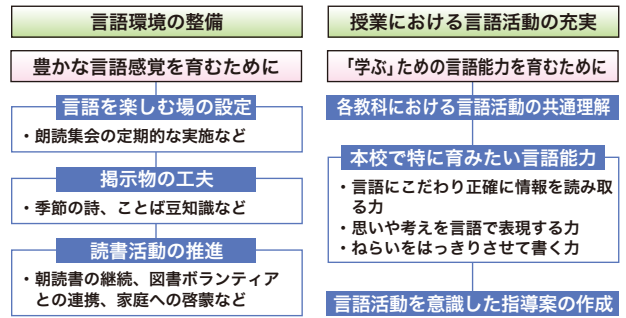
「中仙地域の小・中学校の授業参観をしよう運動」により、学年に応じた指導の在り方や身に付けさせるべき力について共通理解を図った。

(3) 習得と活用のバランスを大切に授業づくり



- ・授業改善の三つのポイントを意識した授業づくり
- ・三つのポイントに重点を置いた授業研究会の実施

②言語活動の充実



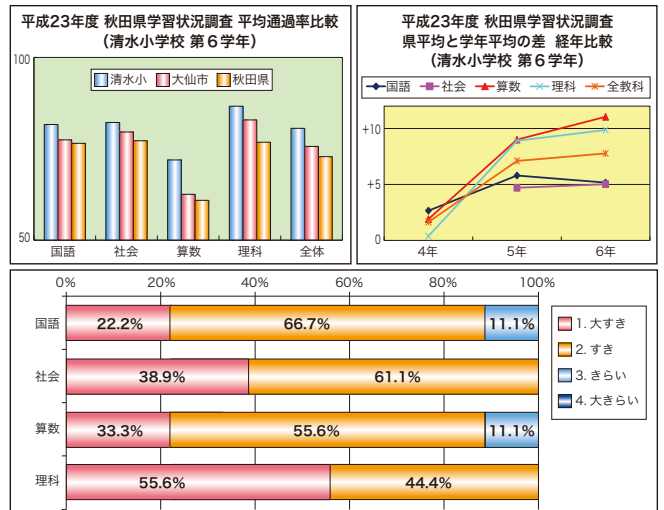
4 成果と課題

【成果】

- ① 12月に実施された県学習状況調査の6年生の結果は、次のとおりである。

6年生は、県及び市の平均を上回っており、習得と活用の両面において概ね良好と捉えている。

また、学習意欲の面においても、「教科が好き」と回答している子どもが多く、授業改善の成果とも捉えている。



② 話し方、聞き方、ノート指導について子どもたちの意識が高まった。

◎児童による学校評価より (第6学年)		7月	12月
「自分の考えをはっきり話したり、人の話をしっかり聞いたりしていますか」(%)	している	94.0	97.9
	していない	6.0	2.1
◎児童質問用紙より (第6学年)		4月	9月
「算数の授業で問題の解き方や考え方が分かるようにノートに書いていますか」(%)	している	88.9	100.0
	していない	11.1	0.0

【課題】

- ・中・長期的課題解決のための学年に応じた指導プラン作成
- ・「学び方」指導に関する小学校と中学校の円滑な接続
- ・言語活動の系統的・段階的指導計画の作成
- ・6年生の成果を他学年にも生かした授業改善の推進

被災地支援・交流活動

いろ
色彩のない大槌に花を届けよう
～ 岩手県大槌町での被災地支援・交流活動～
大仙市立太田中学校 教諭 篠塚 ひとみ

平成23年3月11日午後2時46分に発生した東日本大震災によって、命と生活が脅かされる事態に生徒は大きく心を動かされた。秋田県は比較的早く日常生活を取り戻したものの、山を越えた隣の岩手県では大きな被害を受け、未だ復興にはほど遠い状況にある。自分たちにできることを考え、実践することがこの未曾有の災害と向き合い、これからをたくましく生きぬく生徒の育成になるのではないかと考え、本校生徒会を中心に岩手県大槌町への支援、大槌中学校、吉里吉里中学校との交流活動に取り組んできた。

1 手作り「うちわ」を届けよう

全校生徒180名による「手作りうちわ」を、2年生代表生徒が吉里吉里中グラウンドにある同地区仮設住宅に届けてきた。



いろ
2 色彩のない大槌に花を届けよう



8月、春から丹誠込めて育てたプランター300個を3年生全員の手で大槌小・中学校仮設校舎敷地に設置してきた。また、津波被害にあった吉里吉里中学校のグラウンドの清掃作業も実施した。

3 太中祭(学校祭)に大槌中生を招待

10月、大槌中学校生徒会執行部11名と教職員4名を学校祭に招待し、オープニングイベントを共催した。昼までの滞在の後、力強いエール交換をし、全校生徒で帰りを見送った。

4 冬越しのパンジーを届けよう

10月、夏から育てていたパンジーの鉢植えを、1年生全員が仮設住宅に届けてきた。



5 「だまこ汁」をふるまおう

11月、2年生全員が吉里吉里中グラウンドの仮設住宅と吉里吉里中全校生徒に太田の食材たっぷりの「だまこ汁」をふるまってきた。併せて、生徒の家庭から提供を受けた「あきたこまちの新米」550kgを仮設住宅に届けてきた。



6 クリスマスカードを届けよう

12月、全校生徒が制作した「クリスマスカード」と太田の「おやき」を、1、2年生有志が仮設住宅に届けてきた。

7 最後に

全校生徒がこの活動に参加し、被災の現状を目の当たりにし、命あることの大切さ、当たり前のできる日常生活がどれほどありがたいものかを実感した。互いの活動や思いを発表し合った報告集会で、「自分が励ますつもりだったのに、大槌の方々から元気と勇気をもらいました」と語った生徒の言葉に全てが凝縮されていた。



支援に必要な物資、人材、移動手段の確保等は保護者はもちろん、地域からの多大なる協力をいただいた。改めて地域の存在の大きさを実感した。地域との絆をより強固なものにしつつ、支援・交流活動での貴重な体験や感じた思いを今後の生活に生かしていきたいものと考えている。

各小・中学校の被災地支援・交流活動

届けたい“想い”
わたしからあなたへ

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 佐藤 信夫

春の「ランドセル」や「ヘルメット」を贈る活動から始まり、市内の子どもたちの支援は冬も冷めることなく、一年経った今も、温かな心のリレーとしてつながり続けている。

- 被災地への訪問……大曲小、大曲中、平和中、太田中
- 被災地からの訪問……花館小、大川西根小、刈和野小、中仙小、協和小、高梨小、太田南小、大曲中、太田中

- ・市や県の被災者招待事業による音楽交流や冬の小正月行事を体験する交流などが行われた。
- ・大曲中学校は文部科学省委託復興教育支援事業に取り組み、大船渡市立赤崎中学校との交流を続けている。

○義援金や物資などの支援

…全ての小・中学校

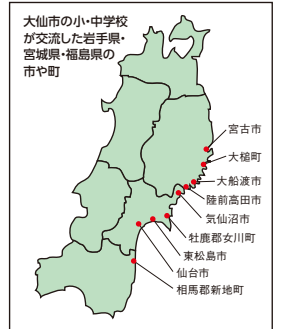
- ・文房具、毛布や古着、うちわ、花の種などを贈った。

○米のプレゼント…清水小、豊岡小、協和小、高梨小、太田東小

- ・学校田などで汗を流して収穫した米を贈った。

○メッセージ等の交流…大曲小、花館小、神宮寺小、清水小、協和小、大曲中、平和中、西仙北東中、仙北中、太田中

- ・クリスマスカードや紙飛行機のメッセージなど、心のこもった言葉の交流も行われた。



大仙市中学生サミット

今だから、今こそ
大仙“絆”プロジェクト

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 佐藤 信夫

中学校から小学校へ「輪」をひろげます

そして、小・中学生から地域へと「和」をひろげます

2年目の「絆プロジェクト」。東日本大震災の影響もあり、市内中学生が取り組むプロジェクトも、ボランティア活動や節電行動など、被災地に目を向けながら自分たちのふるさととそこに住む人々に心を向けるようになった。

今年度、より主体的な活動を目指して事務局校を輪番制とした。各校では、中学生のアイデアによる中学生自身の実践行動が展開され、小学生との連携の輪も広がってきた。

平成24年度は、中仙中学校、豊成中学校、太田中学校、仙北中学校が事務局となり、中学生から「あいさつ」「リサイクル」「エコ」「ボランティア」を発信していく予定である。



8月1日 大仙市中学生サミットの様子(於・大曲中学校)

PTA連合会



変化する環境へ
対応できるPTA

大仙市PTA連合会 会長 齊藤 亘

12年前の三学期を終えようとしていた頃、友人から一本の電話があった。それは、PTA役員任期を残らずかした友人が後任に私を推薦したと言う内容だった。それから、可愛い子どものためなら少しぐらい時間を費やしてもと思いつつながら4300日余りの時を過ごした。

この間、義務教育の現場も邁進に努め、様々な取り組みがなされた。「ゆとり教育」、「二学期制」、「週休二日」などなど…。その教育の現場に私ども保護者は乗り遅れることのないように一生懸命だったような気がする。教育を受けさせる義務を負う保護者にとって当然のことでも、子どもの成長を見守ることで喜びを感じることができた。

また、保護者や地域も時を刻むごとに変化してきたように思う。少子高齢化や市町村合併などを背景に広域な就学や家庭の核家族化が増え、学校を支える地域が変わる傾向をたどっている。今後、学校統合が進み、学校を取り巻く地域が拡大すれば、それはさらに変化することが容易に想像できる。この様な環境を整える役割を担う私どもPTAの活動は、これまで以上に研鑽を重ねなければならないと考えている。

このような課題に向き合い、会員の皆様にはこれまで以上のご協力をお願いしながら、連合会の発展に努めてまいりたいと思う。大仙市は県内でも屈指の広域な地域で、旧市町村の垣根を取り払うことは難儀なことである。しかし、その多様な地域の特徴を活用できる有効な地域でもあると思う。

「けやき」のような大ききたくましいPTA連合会を皆で築き上げたい。



幼稚園地域活動事業

幼・保・小の連携を通して
～子どもの育ちと学びをつなぐ～

大仙市立みどり幼稚園 園長 飛嶋 美津子

本園では、子どもの育ちと学びを効果的につなぐために、高梨・横堀両小学校の協力を得て、同地域の仙北南保育園と共に連携・交流活動に取り組んでいる。

1 園児・児童の交流から

- 春・高梨小1年生が幼稚園へ
(教科書の読み聞かせ)
- 夏・高梨小サポート事業で幼稚園へ
(踊りを教えてもらう)
- 秋・高梨小・横堀小の学芸発表会予行へ
・園行事「親子ウォーキング」で
(高梨小3年生の案内人)
- 冬・高梨小・横堀小の生活科へ
(おみせやさんごっこへ招待)
・各就学先へ(体験入学)
・高梨小1年生が幼稚園へ(一緒に遊ぶ)



2 教師の連携・交流から

- ・幼稚園での保育参観や小学校での授業参観交流と研修
- ・両小学校との就学前園児についての連絡会等

3 子どもたちの変容など(成果の一例)

- 園児は児童への憧れを抱き、小学校生活への期待感を高めた。
- 友達との会話で楽しかったことが語られている。
- 交流した「おみせやさんごっこ」を自分たちの遊びに取り入れて活動するなど、遊びの広がりが見られた。
- 家庭でも会話が弾み、活動への家族の関心が高まった。

キャリア教育

自らの夢をはぐくむキャリア教育

大仙市立協和小学校 教諭 小野 静枝

本校では、かねてから小・中連携を推進しており、昨年度からは9年間を見据えたキャリア教育に取り組んでいる。

1 9年間を見通したキャリア教育年間指導計画の作成

研究部のキャリア教育推進班が中心になり、本校のカリキュラムデザインを基に、キャリアの四つの基礎的・汎用的能力等、身に付けさせたい力を関連させた年間指導計画を作成した。これを活用することにより、小学校から中学校へと見通しをもった指導ができるようになった。

2 夢追い講演会の開催(9月20日)

アテネ五輪アーチェリー銀メダリストの山本博氏をお迎えしての講演会。今もなお夢に向かって挑戦しておられる山本先生から、小・中学生のこの時期にしておくべき大切なことをたくさん教えていただいた。この他に、中学校主催で行われた2回の講演会に、4、5、6年生が参加した。



3 各教科等における授業展開の工夫

日々の学習活動の中に、キャリア発達に関わる活動が多くあることを全教職員で共通理解し、実践にあたっている。例えば、4年生の総合的な学習の時間では、「未来を見つめて、今10歳!ぼくらの1/2成人式」の単元を計画し、たくさんの方々とつながりを考える学習活動を展開して、意欲的に自分自身を見つめ、学習を深めることができた。



豊かな体験活動推進事業

大仙市農家民宿宿泊体験

大仙市立中仙小学校 教頭 佐藤 政美

平成23年度、市の事業「大仙市農家民宿宿泊体験」に、5年生33名が2泊3日で参加し、次のような体験活動を行った。

1 大仙市内で実施した体験活動

- 1日目
野鳥観察：ハヤブサ等の観察
農業体験：稲刈り、いもほり等
夕食調理体験：カレーライス作り
- 2日目
魚釣り体験：ヘラブナ釣り
昔語り体験
花火工場見学
郷土料理体験：いものこ汁等
- 3日目(農業科学館)
竹細工体験：カブトムシ・干支作り
米粉パン焼き体験



2 農家民宿での宿泊体験

男女別5～6名の六つのグループが、6軒の農家民宿(角間川3、飯田2、大川西根1)にお世話になった。どの民宿でも、子どもたちを我が子のように温かく受け入れて家族のように世話をしてくださった。アットホームな雰囲気でも過ごした3日間は、自然教室の宿泊体験とひと味違った体験ができ、有意義な学習となった。



小学校 理科

理科好きな子どもを
育てる授業をめざして



大仙市立横堀小学校 教諭 谷口 泉子
(高梨小、東大曲小、四ツ屋小を兼務)

理科が好き、科学的に考えることも好きという子どもを育てたいと考え、心がけて実践したいいくつかを紹介したい。

1 子どもの「？」を学習課題に

子どもが「なぜ?」「どうなるだろう」と疑問や探究意欲がわくように事象提示や発問を工夫した。それを学習課題につなげると、子どもたちが主体的に関わる学習になる。



2 問題解決的な学習の流れに

「学習課題→予想・仮説→観察・実験→結果→考察→まとめ」という問題解決的な学習の過程を習慣化した。それにより子どもも教師も1単位時間見通しをもって学習に取り組むことができた。また、学習の流れに基づいた分かりやすい板書を心がけ、A4判ノートを使わせて、学習が見えるノート指導も進めてきた。



3 科学的に思考し表現する活動を大切に

次のような学習活動の積み重ねにより、科学的なものの見方や考え方ができる子どもたちが育ってきているように思う。

- 理由を付けて予想する。
- 結果を表に整理したり、グラフに処理したりする。
- 結果と考察は分けて表現する。

中学校 数学

兼務のよさを生かして



大仙市立西仙北西中学校
教諭 田村 尚之
(西仙北東中、平和中、南外中を兼務)

中学校勤務の経験は、現任教しかなかったが、今年度は同時に複数校で働くという新たな経験を味わっている。



1 兼務のメリットを生かす

- ① 調査的活動が容易にできる。今年度は、分数の理解に関する中1ギャップに着目し、意味理解を深めるために図と立式を結び付ける学び直しの学習の定着状況の調査(合計278名を対象)に取り組んだ。
- ② 中学2年生の等積変形の考え方のベースになる図形の見方の指導を複数校の中学1年生に対して共通教材で行うことができた。
- ③ 先生方の有効な実践やよく練られた教材を他校へ紹介し、タイミングよく活用してもらうことができることである。



2 まとめ

学校ごとに生徒の気質も違うが、できるようになりたいという子どもたちの願いは変わらない。その表現の仕方が素直であるか不器用であるかの違いを広く受け止め、教室に入るときは明るいトーンであいさつし、クラスに受け入れてもらえるように心がけている。

教育専門監

私の実践

中学校 国語

授業をつくる



大仙市立中仙中学校 教諭 小原 衿子
(豊成中、太田中、仙北中を兼務)

1 年間指導計画を活用する

1年間で全ての指導事項を学習できるように、年間指導計画を作成した。単元の計画を考える際には、その単元で何を指導するのかを確認することから始めている。

2 単元の計画を子どもに見えるようにする

子どもに学習の見通しをもたせ、主体的に学習に取り組む態度を育てたいと考え、単元の計画と振り返りが一体化したカードを生徒に持たせている。小学校では単元の計画を教室内に掲示する実践が見られる。

3 言語活動を実際にやってみる

子どもにやらせようとする言語活動を考えたら、まず子どもの立場になって自分で実際にやってみる。すると、めあてに迫るためにどんな手立てをとればよいかや、どのような言葉で発問や指示をすればよいかなどが明確になる。

4 読んで、考えて、書く授業

書くことによって考えをまとめたり、深めたりできる。授業の中に考えて書く活動を設定している。

- 自分の考えをノートに書く。
- グループ活動で話し合ったことをミニボード等を書く。
- 考えを練り直しまとめとして書く。



5 評価は具体的な子どもの姿で

評価規準は「このように書いていたらBとする」などと、具体的な子どもの姿で決めておくようにする。

中学校 英語

チームとしての報酬を
喜べるように



大仙市立大曲中学校 教諭 吉澤 孝幸
(大曲西中、大曲南中を兼務)

本年度複数校に勤務するに当たり「担当学年の垣根を取り払い英語科全員がチームとして指導に当たること」を大切にしたいと考えた。これは難しいことであるが重要なことでもある。授業における実践では、単調になりがちな音読をバリエーション豊かにするため「ジェスチャー付き音読」を3校で共通実践した。



また、英語力アップのため3校共同で「重要英文CD」を製作し、同じ学習システムを同じサイクルで推進してきた。

さらに、地域商店街と連携して実施する「わいわいイングリッシュ」も、3校の先生方とチームを組むことでより安定感のある活動になってきていると考えている。子どもたちが英語に親しみ、英語力をアップさせるために、チームとして悩み、チームとして喜び合える連携が指導の支えになると思っている。



コロナブスの卵わくわくサイエンス事業

生徒も先生も科学にわくわく

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 加藤 勝 則

生徒一人一人の報告書は大仙市教育委員会ホームページで

市教育委員会では、学習指導要領の改善事項の一つである“理数教育の充実”を図るため、「観察・実験授業スキルアップ出前研修」、「中学生首都圏大学・総合研究所派遣研修」の二つの研修を柱とする本事業を実施した。

1 観察・実験授業スキルアップ出前研修

楽しくわかる理科の授業づくりを目指し、渡邊義實先生を講師として、市内の12中学校と7小学校で実施し、延べ143名の教員が参加した。



小学校では、主として新学習指導要領の指導のポイントや単元に身に付けさせたい力をはじめ、「薬品や実験器具の使い方」「植物の育て方」「電気」「水溶液」「月の満ち欠け」など、基礎的な内容を中心として研修が行われた。

また、中学校では教員の要望に応じて、「酸化銅の質量」「定比例の法則に関する実験」「露頭観察」など、具体的な観察・実験に関する指導力の向上につながる内容が扱われ、「明日からの授業にすぐに生かせる」という感想に代表されるように、大好評であった。何よりも、渡邊義實先生の授業にける熱意や専門性に触れた教員は、教材研究の大切さを改めて実感した貴重な研修となった。

2 大仙市中学生首都圏大学・総合研究所派遣研修

12月26日（月）～28日（水）の3日間、市内各中学校から1名ずつ計12名の生徒が参加して実施された。

1日目は、埼玉県和光市にある理化学研究所を訪問し、施設の概要説明、脳のはたらきと役割等についての講話、巨大加速器の見学を行った。2日目は6名ずつA・Bの2班に分かれ、A班は前日と同じ理化学研究所で電子顕微鏡による昆虫等の観察、4Dシアターやスーパーコンピュータの見学、B班は千葉大学医学部にて微生物に関する講話、油浸という特殊な方法で高倍率の顕微鏡を用いての微生物の観察・実験などを行った。

いずれも日本の最先端をいく研究についての講話や実験で、中学生には難しい内容も含まれていた。しかし、実際に自分の目で見るとマイクロの世界や高度な実験装置など、まさに「わくわく」するものばかりであった。また、各所員の研究にける熱い思いを直に感じ取ることができた。



特に、「研究が一番でない」と意味がない」「脳の発達を考えると中学生の時にしかできないことがある。それは、勉強・スポーツ・友達づくりである。」という理化学研究所の若い研究者の言葉は、多くの生徒に強く響いたようだった。

参加した生徒からは、「〇〇になりたいという夢に向かって、さらに頑張りたい」とか「将来は、人のために役立つ発見をしたい」などの感想があり、この研修が自分の将来を見直すきっかけとなったようである。

何年か後、本事業に参加した生徒が、大仙市のみならず、日本や世界のために大活躍してくれることを強く願っている。



地域等の課題に応じた教育課程研究事業

小学校外国語活動及び外国語科を軸にした小・中連携の在り方

大仙市立横堀小学校 教諭 田口 倫

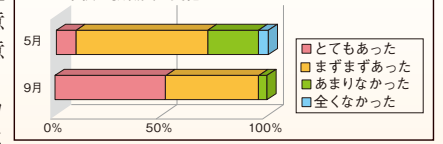
昨年度からの2年間、国立教育政策研究所の指定を受け、仙北中学校と共に標記事業の研究に取り組んだ。

1 成果の一部

- コミュニケーション活動の重視と効果的な交流や系統性を踏まえた授業実践により、児童生徒のコミュニケーションに対する意欲や表現力の向上及び中1ギャップの解消を図ることができた。
- 小・中学校の効果的な交流の在り方について研究を深め、交流の活性化を図ることができた。
- 交流学习等の蓄積により、学びの連続性を踏まえた指導の意義について教師の意識改革が進んだ。
- 5年間を見通したカリキュラム開発により、学びの連続性を意識した指導が可能となり、指導方法の工夫改善に生かすことができた。



小・中連携の英語活動を行うことで、本校の教職員に変化はありましたか



2 課題の一部

- 他教科等においても小・中学校の円滑な接続に資するカリキュラム開発に取り組む必要がある。



環境教育に関する取組を活用した調査研究事業

小・中連携で取り組む環境教育

大仙市立角間川小学校 教諭 六郷 正博

「地球が今、大変なことになっている。みんなで助けよう！」大曲南中学校の生徒の熱いプレゼンテーションに心を動かされて、今年度も3校で連携しながら取り組んできた環境教育。

「田んぼに住む生き物」を藤木小と一緒に調査した5年生。絶滅の恐れのあるゲンゴロウやメダカなど約80種類の生き物がすんでいたことに驚いた。また、田んぼには「地下水の確保」「気温上昇の防止」などの大切な役割があることにも気付くことができた。



11月のオープンスクールで新エネルギーについて学んだ6年生は、「これからは安全で環境に優しい発電方法が増えてほしい。」という願いを発表した。その後のアラスカフォトライブに参加した4年生。アラスカの自然やオーロラに大いに感動し、「この自然を必ず守っていかねば。」「絶対アラスカに行きたい。」などと、自然とした気持ちを抑えることができずにいるようだった。

このような学習を積み重ねてきたからこそ、電気の消し忘れが減り、前年比で学校の電気使用量20%削減が実施できたのだと思う。今日も地球のピンチを救うべく、小さいヒーローたちは、「身近なところから、そしてできることから無理をせず」を合い言葉に環境に働きかける活動を行っている。



「大仙っ子 読書の日」に係る取組事例

日替わりメニューで盛り上げて!

大仙市立藤木小学校 教頭 柴田 和子

本校は、自ら学ぶ力と豊かな心を育てる学校図書館をテーマに、積極的に活用される図書館づくりに努めている。

今年も読書週間に合わせ、14の日替わりメニューからなる「藤木ミラクル読書ウイーク」を開催した。

腹話術師を招いた読書集会、本の葉コンテスト、図書ボランティアの読み聞かせ、派遣職員による大型絵本の紹介、ミニシアター、職員によるおはなしのへや、好きな本ベスト3、おはなしノート展、親子で読書、おすすめの本カードの紹介等々、催し物は盛況のうちに終了した。



中でも「親子で読書!」は、大勢の保護者の協力が得られ、予想以上の反響があった。これは一冊の本を親子で読み合い、子どもの感想に保護者がコメントする活動である。保護者の負担はあるものの、子どもの感想に応えた親のコメントは、ほのぼのと温かく、心と心を通わせる読書の役割を確認させてくれた。



「ミラクル読書ウイーク」は、新たな本との出会いの場、心の交流の場となって読書活動を盛り上げてくれた。

「ミラクル読書ウイーク」は、新たな本との出会いの場、心の交流の場となって読書活動を盛り上げてくれた。

大仙市立中学校生徒海外派遣事業

ゴールドコースト紀行

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 高橋 規子

生徒一人一人の報告書は大仙市教育委員会ホームページで

東日本大震災の影響で仙台空港利用の見通しが不透明であることなどから、昨年度までの研修地の変更を余儀なくされ、新たな研修地と研修内容を吟味するところから、今年度の事業がスタートした。

ゴールドコーストは有名なリゾート地ではあるが、郊外へ足を伸ばすと、ワイン製造、競技用馬の飼育、砂糖製造など、地域ごとに特色ある産業が行われているのどかなローカルコミュニティが広がっている。生徒たちは明るく気さくなホストファミリー



に恵まれ、存分にファームステイを楽しむことができた。

今回、参加した生徒たちは、すれ違うオージーたちに自分たちから“Hello”と声をかけたり、手を振ったりするなど積極的に、日本人観光客や日本語の通じる店が少ないなどという環境が、逆にとても良かったと思われた。様々な場面で、このように自分から発信していく生徒たちの姿を目にし、とても頼もしく、また、うれしく感じた。

今回本事業に参加した生徒たちが、オーストラリアで体験したことや学んだことを学校や地域にどんどん発信し、いずれは将来の大仙市のリーダーとして活躍してくれることを楽しみにしている。

大仙市特別支援教育支援充実研修会

「理解」から「支援」へ

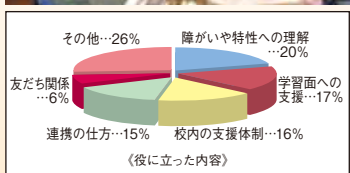
大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 石山 廣子

1月12日(木)、市内の幼稚園、小・中学校に配置されている支援員及び学級担任等関係職員106名合同の「支援」についての研修会を、秋田大学“まなびプロジェクト”事業との共催で実施した。



はじめは、斎藤孝秋田大学客員教授の講話で、「①子どもの特性を理解する、②居心地のよい環境を整える、③よりよい支援につなげるために」の3点を中心とした「授業のユニバーサルデザイン」の提案があった。続いて、中仙小学校1年部の学級担任と学校生活支援員が、スケジュール表や家庭との連携等について事例を報告した。

その後、16グループで構成されたワークショップを行った。参加者は情報交換や協議の中で専任スタッフの助言を受け、より具体的な支援の在り方について研修を深めた。「支援」という言葉のもつ多様性、即ち「子ども一人一人を理解し、寄り添い、支援につなげる」ということを全教職員が共通理解し、「支援」を形にして行動していくことの大切さを学び合うことができ、充実した研修会となった。



平成23年度 教育研究所のあゆみ

1 大仙市教職員研究集会

- ①第1回大仙市教職員研究集会(平成23年4月20日)
 - ◇教育長講話 ◇「特色ある取組」発表(1園4校)
- ②第2回大仙市教職員研究集会(平成23年8月9日)
 - ◇職務別等研修会(午前)
 - 生徒指導主事研修会(特別支援教育の視点から)
 - 教科研修会(国語、英語・外国語活動の小・中連携)
 - ◇全体会(午後)
 - 中学校生徒発表(小・中連携)
 - 学力向上推進委員会提案(教科指導のポイント)
 - フォーラム「交流と連携～海外の教育事情に学ぶ～」
海外派遣等の経験者及びCIRによる紹介など

2 学校訪問(教育委員等訪問、教育長等訪問を実施)

- ①教育委員等訪問…市教育委員会や各学校の教育方針等の共通理解を深めた。
- ②教育長等訪問…学力向上、交流・連携、情報提供等について状況を把握し、改善の手立てなどを確認し合った。

3 学力向上(学力向上推進委員会)

- 教科指導における小・中学校の円滑な接続のための資料の提供
- 全国や県の学習状況調査分析結果に基づいたフォローアップシート等の作成と提供(社会、理科、英語は、新学習指導要領の課題等と県学習状況調査に対応)

発行 大仙市教育研究所

〒014-8601 秋田県大仙市大曲上栄町2-16
TEL 0187-63-9400 FAX 0187-63-9401
E-mail om-kyouken@edu.city.daisen.akita.jp